



Data

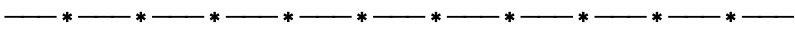
監督・脚本・製作：シェームズ・グレイ
出演：マリオン・コティヤール／ホアキン・フェニックス／ジェレミー・レナー／アンジェラ・サラフィアン／マヤ・ワシントン／パプスキー／イリア・ヴォロク

👁️👁️ みどころ

移民をテーマとした名作はヨーロッパの専売特許ではなく、「新世界の玄関」エリス島を持つアメリカだって！

『ギャング・オブ・ニューヨーク』（90年）の舞台は1960年代のニューヨークだったが、本作はポーランドからの移民姉妹の過酷な運命を描くもの。ヒロインをめぐる2人の男の絡みが物語の軸だが、私は邦題にも、結末にも少し疑問が・・・。

しかし、テーマ良し、俳優良しの本作は、必見！



■□■テーマ良し、俳優良し、しかし結末は・・・■□■

ヨーロッパには、『この自由な世界で』（07年）（『シネマールーム21』247頁参照）、『ロルナの祈り』（08年）（『シネマールーム22』133頁参照）など、（不法）移民をテーマとした名作が多い。そんな中、アメリカ・ニューヨーク生まれのジェームズ・グレイ監督が、1923年にロシアからエリス島にたどり着き、入国審査を経てアメリカに移住してきたロシア系ユダヤ人である祖父母の体験話を元に、「移民」をテーマとした本作を監督、脚本、製作した。

アメリカには「新世界への玄関」と呼ばれた、「移民局としてのエリス島」が有名だが、本作を観れば、ポーランドから「新世界アメリカ」への移民を夢みた本作のヒロイン、エヴァ・シブルスカ（マリオン・コティヤール）とその妹マグダ（アンジェラ・サラフィアン）の姿や、1921年当時のエリス島での移民の取り扱い風景がよくわかる。『ギャング・オブ・ニューヨーク』（01年）はイギリスからの移民である「ネイティブ・アメリカン」と呼ばれるプロテスタント系のギャング集団と、後にアイルランドから移民してきたカト

リック系のギャング集団との1860年代のニューヨークにおける「対決」を描いた名作だった(『シネマルーム2』 49頁参照)がさて、エヴァとマグダのアメリカへの移民の可否は？

まずは、そのテーマや良し。そのうえ、本作でポーランド語と英語を操るヒロインのエヴァを演じるのは、『エディット・ピアフ 愛の讃歌』(07年)でアカデミー賞主演女優賞を受賞したフランスのマリオン・コティヤール(『シネマルーム16』88頁参照)だから、俳優も良し。しかし、弁護士の私の目から見ると、本作が描く結末は「若干問題あり」・・・？

■□■この男の狙いはナニ？単なる善意とは思えないが・・・■□■

エヴァとマグダは肩を寄せ合いながら入国審査局の審査を受けたが、マグダが風邪気味なののがかり。そこで、エヴァは「気を強く持って、前向きに！」と元気づけたが、ちょっと咳をしたマグダを見とがめた審査官が、「結核の疑いがあるので隔離病棟へ」と指示。さらに、エヴァについても①滞在先の叔母夫婦の住所がデタラメであるうえ、本人が迎えにきていない、②所持金がない、③船の船上で問題を起こしていた、という理由で入国を拒否され、「強制送還だ」と言われたから、大変。多くの申請者を「一丁あがり方式」で処理している審査官はエヴァが異議を申し立てても一切聞かずに耳をもちたないから、これにて万事休す！

そう思ったところに登場してくるのがブルーノ(ホアキン・フェニックス)だ。なぜかエヴァに対していくつかの質問を投げかけたブルーノは係官と少し話し込んでいたが、その後エヴァに対して「入国できることになった」と告げたから、エヴァはビックリ！これは、きっと係員に渡した「賄賂」が効いたためだろうが、なぜブルーノはそんな行動を？それは劇場主として、女たちを踊らせて稼いでいるブルーノのその後の行動をみれば明らかだが、問題はそれが善意のものかどうかということだ。

踊り子たちはブルーノが美人のエヴァばかり「特別」扱いすることに反発を示したが、さてエヴァは踊り子としてちゃんと稼いでいけるの？ブルーノのコネをもってしても結核の疑いのあるマグダの「釈放」はできなかったから、エヴァはマグダの治療費も払わなければならないらしい。すると、エヴァがそんなカネを稼ぐ方法はおのずと限定されるのでは・・・？

■□■2人の男の狭間で、エヴァはどんな決断を？■□■

エヴァは踊り子たちからブルーノのことを、「たまにキレたら怖いけど、いい人よ」と聞かされていたし、私たちの目にもブルーノはエヴァに対して紳士的に振る舞っていることは明らかだ。舞台に立つエヴァを見初めた(?)若者のたつての要望によって、ブルーノがエヴァを「世話」してやるシークエンスも、決して強制ではなく、とことん納得づくだから、これで責められてはブルーノがかわいそう。また、ブルーノは自分の優越的地位を利用して強引にエヴァを「我がモノ」にすることだってできるはずだが、なかなかどうしてブルーノは紳士的。私はついそう思ってしまうが、エヴァが意外にブルーノに対して厳

しく冷たいのが少し気がかりだ。

他方、中盤から登場するのがブルーノの従兄弟だというマジシャンのオーランド（ジェレミー・レナー）。ブルーノがエヴァに近付いたのは、エヴァの美しさに気づき、「この女なら踊り子として使える」と考えたためだが、その後の展開を見ていると、少しずつエヴァに対して愛情のようなものを持ち始めていることがわかる。しかし、「商売道具」に手を出すのは禁物ということもあって、ブルーノはエヴァに手を出すのを控えていた（？）が、オーランドの方は一目見たときからエヴァを気に入り、さまざまなモーションをかけてくることに・・・。

エヴァがエリス島でオーランドの慰問ショーを観たのは、せつかく叔母の家を訪ねて行ったのに、叔母の夫が警察に通報したことによって再びエリス島へ戻されたためだ。そんなどん底状態にある時に、オーランドから「君は美しい」と言われ、一輪のバラを捧げられたら、誰だって心が癒されるのは当然。そこでエヴァは妹の治療費を稼ぐためにも強く生きようと決意し、ブルーノに対して「もっとお金を稼ぎたい」と申し出たが、さて、その意味するものは・・・？



© 2013 Wild Bunch S.A. and Worldview Entertainment Holdings LLC

■□■この従兄弟同士は、とにかく水と油！■□■

『グラディエーター』（00年）で、かなり性格のひん曲がったローマ皇帝ルキウス・アウレリウス・コモドゥス役を見事に演じたホアキン・フェニックスは、『ザ・マスター』（12年）（『シネマルーム30』213頁参照）でも、性格に難のある、元海軍勤務の男フレディ役を見事に演じていた。彼はこういう役がまさにハマリ役だ。しかし、本作でもオーランドの登場後、エヴァをめぐる男同士の意地の張り合いになっていくと、いかにブルーノの性格がひん曲がっているかが少しずつ明らかになっていく。

他方、一目見ただけでエヴァに対して、「君は美しい」などと齒の浮くようなセリフを吐く男オーランドの方も、一見紳士風だがいかにもウソっぽい。せつかく「新大陸」に上陸しながら、こんな男としか知り合うことができなかったエヴァはかわいそうという他ないが、本作中盤ではかなりイヤな性格のこの従兄弟同士がいかにも互いを嫌い合い、水と油の性格であるかが明らかになっていく。挙げ句の果ては、あつと驚く殺人（傷害致死？過失致死？）事件まで発生するので、それに注目！

■□■邦題に異議あり！原題のままでいいのでは・・・■□■

本作の原題は『The Immigrant』つまり『移民』だが、邦題はなぜ『エヴァの告白』にしたの？それは叔母さんから「信仰を失ってはダメよ」とクギをさされていたエヴァが、ある日教会を訪れ、「告解室」で行う「告白」に注目したためだ。たしかに、ここでエヴァが神父サマに対して行う、「私は、たくさんの罪を犯しました・・・」で始まる告白には「あつと驚く」内容が含まれているが、私にはその告白は物語のすべてをリードするようなものとは思えない。つまり、湊かなえの原作『告白』を中島哲也監督が松たか子主演で映画化した『告白』（10年）は、当初30分間も続く衝撃的な告白が物語をリードした（『シネマルーム25』51頁参照）が、本作にみるエヴァの告白はそれほどインパクトのある告白とは思えないわけだ。

むしろ、次々と襲ってくる「移民」であるが故の試練をエヴァがいかに乗り切ろうとするのが本作のテーマだから、邦題も原題どおり『The Immigrant』＝『移民』でよかったのでは。

■□■この結末には疑問が・・・。「移民ビザ」は？■□■

『エディット・ピアフ 愛の讃歌』で、マリオン・コティヤールは、『Ray/レイ』（04年）にみたレイ・チャールズ（『シネマルーム7』149頁参照）と同じように、①男問題と②薬問題で波乱万丈の人生を送るエディット・ピアフを見事に演じていた。同作を観れば、10歳で『ラ・マルセイエーズ』を歌った時から、オリンピック劇場の大舞台上で『水に流して』を歌いあげて歌手人生を終わるまで、その生きざまがいかに一貫していたかがよくわかる。

しかし、本作にみるエヴァは、ある時はブルーノを頼ったり、ある時はオランダを頼ったり、そのスタンスは中途半端と言わざるをえない。私に言わせれば、本作中盤に想定外の「殺人事件」が起きるのは、ある意味エヴァの男の選び方が中途半端なためだ。しかし、もし「殺人事件」の犯人がエヴァだとされれば、エヴァが移民として生きていけないのは当然だが、さてブルーノはどんな手段でエヴァを守ってやるの？また、賄賂を使えばマグダを結核の隔離病棟から救出してやることはできるかもしれないが、その後マグダはどうやって生きていくの？

本作は、エヴァがまたまたブルーノの賄賂によって、やっと結核病棟を出ることができたマグダを連れてエリス島から脱出するところで終わる。これはある意味ハッピーエンドだが、弁護士の目にはこの結末には少し疑問がある。それは、2人の「移民ビザ」の取得はどうなっているの？ということだ。アメリカ西海岸に行く列車の切符は手に入れることができたとしても、ポーランドからの移民姉妹がアメリカで生きていくためには、「移民ビザ」の所持が不可欠だが、さてそれは・・・？

2014（平成26）年1月24日記